

第36回テニス学会 報告

後藤 光将 (明治大学)

第36回大会は、東京都杉並区の明治大学和泉キャンパスで2024年6月29日(土)および30日(日)に開催しました。前回大会が2024年12月に開催されたので、わずか6ヶ月の間隔で開催したことになりますが、それにも関わらず、多くの方にご参加いただきました。また、ご講演いただいた講師の皆さま、研究発表をされた方々、協賛の3社など、多くの関係者の支援により、充実した学会大会となりました。心より深くお礼申し上げます。

本学会について、下記の通り報告させていただきます。

1. 第36回テニス学会の概要

2025年11月に東京で、東京デフリンピック2025(日本初のデフリンピック=ろう者が出場するスポーツの大会)が開催されます。今大会にはテニス種目も含まれており、有明テニスの森で実施される予定です。デフテニスは、2023年にオーストラリアンオープン(正式種目として取り入れられました)が、2024年大会には日本から女子選手4名が出場し、ベスト4を独占するという結果でした。デフリンピックを翌年に控えた今年、多くの方にデフテニスを知っていただき、応援していけるよう、今年の学会大会のテーマを「デフテニスの未来」としました。

特別講演では、一般社団法人日本ろう者テニス協会理事長の森本尚樹氏に講演いただきました。日本におけるデフテニスの歩み、東京2025デフリンピックに向けた取り組み、その後の展望について、日本のデフテニス競技を統括する当協会の立場から講演いただきました。

ワークショップでは、参加者のみなさんに「聞こえない状態でのテニス」を体験していただきました。体験後に、聴覚による情報が遮断されるとテニスのプレイにどのような影響があるのか、あるいは、ろう・難聴のプレイヤーに対するテニス指導法のポイントについて、意見交換をし、テニス研究者や指導者が多様な視点・方法を学ぶことができました。2日目にはデフテニス日本代表選手・強化選手を招いてのエキシビションマッチを、多くの参加者に観戦いただきましたが、テニスというスポーツがインクルーシブな社会の実現に貢献するためにも、デフテニスを身近に感じる大変有意義な機会だったのではないのでしょうか。



図1 会場の明治大学和泉キャンパスメディア棟

2. 学会企画

1) 特別講演「デフテニスの現状と今後の展望 ～東京 2025 デフリンピックに向けた取り組み～」 森本尚樹（一般社団法人日本ろう者テニス協会理事長）

以下、講演内容を抜粋して掲載します。

はじめに

本日はこのような場にお招きいただき心から感謝しております。まず、私の自己紹介をしたいと思えます。名前は森本尚樹、1971年生まれの53歳です。生まれは長野県松本市ですが、京都市で育ちました。両親も聴覚障害、妹は聴者です。私は、生まれながらに聴覚障がいを持っていましたが、両親がそのことに気付いたのは妹が誕生した後で3歳の時でした。

通常の学校では難しいということで、小学校と中学校は難聴学級のある学校に通い、高校と専門学校は聴者と一緒に学び、卒業しました。中学生までは軟式テニスをやっていたのですが、高校から硬式テニスにのめり込み、現在も続けています。テニスのほかにもスキー、野球、バレーボール、ラグビー、スノーボードも経験しています。観戦するスポーツとしては、プロ野球、テニス、ラグビーを好んで観ています。スポーツはするの、観るのも大好きです。

現在の仕事は、主に経理業務に従事しています。2021年4月に勤務する会社内での異動で、大阪から東京に移り、現在は神奈川県横浜市都筑区に在住しています。デフテニス関係では、一般社団法人日本ろう者テニス協会理事長、神奈川デフテニスクラブ（KDTC）副部長を務めています。

2009年のデフリンピック台北大会では、テニス競技日本代表監督を務め、テニス競技で複数メダルを獲得しましたので（男子単銀メダル、複合複銅メダル）、一定の結果を残すことができたと思っています。



図1 手話を用いて講演する森本氏

デフスポーツとは？

デフスポーツ大会に参加できるのは、普通の会話が聞こえにくい難聴の選手から、普段補聴器をつけていてもほとんど聞こえない選手まで様々ですが、競技中は補聴器を使用しないことが決められています。ですので、大きな声でもほとんど聞こえない、または無音に近い状態でプレイします。チー

ムスポーツであれば、チームメイトやコーチからの声も聞こえません。個人競技でも対戦相手の発する様々な音が聞こえません。

無音状態でスポーツをするというのは、どのようなことが想像できますか？例えば、リレーでバトンを受け取る時に声掛けで合図することはできませんし、サッカーでオフサイドトラップを仕掛ける場合も声を使うことはできません。また、柔道でわずかな息遣いから相手の様子を窺うこともできません。音が聞こえない状況で、このような場面をどうやって乗り切るのが想像すると、デフスポーツの特性が理解できるかもしれません。そのように想像しながら観ていただければ、デフスポーツ観戦の醍醐味が味わえると思います。

日本のろうあ者スポーツの歴史

日本のデフスポーツの歴史は、以下の通りです。

- ・1918（大正7）年7月7日
日本聾唖協会東京部会の東京野球大会開催（小石川・官立東京聾唖学校）
- ・1926（大正15）年11月
社団法人日本ろうあ協会が第1回ろうあ者体育競技大会開催。この大会は文部省、各ろう学校・ろうあ団体の協力を得て、戦時統制まで継続。
- ・1938（昭和13）年5月
全国ろうあ者陸上競技大会開催（京都）
- ・1963（昭和38）年3月
国際ろう者スポーツ委員会への加盟をめざし、独立したろうあ者スポーツ組織の設立への機運が高まり、日本ろうあ体育協会が創立された。直ちにCISSへ加盟が申請された。
- ・1964（昭和39）年1月
日本ろうあ体育協会は、国際ろう者スポーツ委員会への加盟承認
- ・1964（昭和39）年2月15～16日
第1回全国ろうあ卓球・体操選手権大会開催。149名の選手が参加。
- ・1964（昭和39）年9月17日
東京オリンピックの国内聖火リレー走者に、福岡県立直方ろう学校の岩口政道、福永敬子、大阪市立ろう学校の土崎ふみえが選出
- ・1965（昭和40）年6月27日～7月3日
第10回国際ろう者競技大会（アメリカ・ワシントン）に日本初参加。選手7名、役員4名。28カ国約890名の選手が参加。日本選手は陸上、水泳、卓球に出場。男子マラソンで銅メダル、女子卓球で銀メダル獲得。
- ・1981（昭和56）年8月1日
沖縄県立北城ろう学校が「ろう学校であること」を理由に日本高校野球連盟への加盟を拒否されている問題を、「日本聴力障害新聞」がスクープ報道。大きな反響を巻き起こす。
- ・1982（昭和57）年4月24日
日本高校野球連盟、沖縄県立北城ろう学校の加盟を正式決定。
- ・1982（昭和57）年10月16日～17日
第18回全国身体障害者スポーツ大会（島根県）で、聴覚障害者バレーボール競技が初登場。
- ・1999（平成11）年2月

スイス・ダボスで開催された第14回世界ろう者冬季競技大会のアルペン競技女子回転で銀メダル、大回転で銅メダルを獲得。冬季大会での日本のメダル獲得は史上初。

・1999（平成11）年6月

財団法人全日本ろうあ連盟体育部を廃止し、日本ろうあ体育協会を「日本ろう者スポーツ協会」に改称して、全日本ろうあ連盟に組み入れ。

・2000（平成12）年7月

日米ろう者硬式野球大会（アメリカ・ワシントン）に日本代表チームを派遣。

・2004（平成16）年

日本のプロ野球ドラフト会議で、聴覚障がい者が初めて指名された。石井裕也投手（三菱重工横浜）、中日ドラゴンズに6位指名され、翌2005年、1軍デビューを果たした。

ろうあ者のスポーツ権獲得への闘い ―過去における差別―

▶ろう高校生の地区大会出場権を剥奪

1967年5月、千葉県高等学校陸上競技大会で、東京教育大学（現筑波大学）附属ろう学校高等部3年生の遠藤宗志君（18歳）が、男子100M決勝11秒4、200M決勝22秒6の好タイムで2種目に優勝したにも関わらず、全国高等学校体育連盟は6月17日、遠藤君の関東大会出場資格を取り消しました。ろう学校生徒の参加を認めない具体的な理由について、全国高等学校体育連盟は「聞こえないと危険が伴う。選手の招集など運営上も支障をきたす」と説明しました。

▶ろう学校であること理由に地区大会出場権認めず

1974年7月、全国高等学校軟式野球大会福井県予選の決勝で、福井県立ろう学校が県立武生高校池田分校を破り、初優勝を飾りました。福井ろう学校ナインは、「次は北陸地区大会出場だ！」と躍り上がって喜びました。しかし、福井県高等学校野球連盟は、県大会優勝校である福井県立ろう学校を県代表と認めず、準優勝の高校に北陸地区大会への出場権を与えました。理由は、連盟の規定により、普通の高校であれば出場権を与えられるが、ろう学校には認められないというものでした。このことを知った父兄や関係者から批判の声があがり、全日本ろうあ連盟や日本ろうあ体育協会は、日本高等学校野球連盟に抗議しました。全国から抗議の電話や手紙が殺到し、日本高等学校野球連盟は福井ろう学校を北陸地区第二代表と認め、8月に大阪・藤井寺球場で開催された全国大会への特別出場を認めました。

▶日本高等学校野球連盟によるろう学校差別

1978年に設置された沖縄県立北城ろう学校は、1964年から65年にかけて風疹児童が大量に出生したことに対応して特設された中学・高校6年間限りの学校でした。生徒たちが高校生になった1981年4月、野球部が創部されました。部員16人、全員1年生のチームでした。全国の高校球児の夢舞台である「甲子園」を目指すことになりました。ところが、日本高等学校野球連盟から、ろう学校であることを理由に加盟を拒否されました。その根拠は、「日本学生野球憲章」という規定でした。

デフテニス体験の推進

デフテニスとは、耳の聞こえない人たちがプレイするテニスです。通常のテニスとほぼ同様の競技ルールで行いますが、特別なルールとして、補聴器・人工内耳を外して対戦する必要があります。また、セルフジャッジの試合では、手話サインと呼ばれる手や指で相手にカウントを伝えます。

デフテニスの人口は極めて少なく、全国に200名ほどの選手がいて、全国大会は約50名（2022年）規模で実施しています。他のスポーツと比較して少ない理由は、特別支援学校（ろう学校）にテニス部がないことなど、子どもたちがテニスに触れ合う機会が乏しいことが原因と考えられます。テニススクールに通いたいと思っても、コミュニケーションの問題があつて断られるケースもあり、デフテニスの普及がなかなか進展しない状況です。

このような現状を鑑みて、私たち日本ろう者テニス連盟は、「聞こえないテニス（デフテニス）」の体験会を全国各地で実施しています。デフテニス体験は、耳栓とイヤーマフ（ヘッドホン）を装着して音を遮断することで、聴覚障がい者のテニスを疑似体験することができます。聴覚障がい者が直面する困難に対する理解を深め、共感するための体験です。今日もこのあとにテニスコートでみなさんに体験していただきたいと思っています。

デフテニス選手、指導者が克服すべき課題

デフテニス選手側からのよくある悩みや問題として、次のようなことがあります。

- ・相手がラケットで球を受ける音が聞こえないので、強い・速い球なのか、弱い・遅い球が来るかは視覚で判断する必要があり、次への備えが少し遅れることが多い。
 - ・審判と相手のコールが聞こえない。
 - ・会場のアナウンスが聞こえず、急なコート変更やスケジュール変更がわからないことがある。
- 健聴の指導者やトレーナーからみたデフテニスの悩みや問題として、次のようなことがあります。
- ・伝えたい内容がきちんと伝わってるか不安を感じる。
 - ・ゆっくり大きな声で話しても伝わらない。
 - ・大事な内容は基本的に手話通訳を介して会話する必要がある。

しかし、健聴の指導者がデフ選手を指導して、新たな気づきを得られるメリットを感じる場面もあります。聞こえる人との違いを知ることにより、丁寧に伝えることの大切さを実感し、コミュニケーション方法を見つめ直すなど、日常生活の様々な場面での対応力が身につくよい経験となるようです。

これからデフテニスに関わる指導者も増えてくると思います。その際のアドバイスは、選手とのコミュニケーションをしっかりとること、選手それぞれの技術やメンタルなどのデフ選手独特の競技特性を知ることが大事だと思います。もちろん、組織（協会）を理解することも大切です。相手（デフ）の立場に立った対応をしていただけるとありがたいです。うまく伝わっていないと感じたら、何度でも丁寧に伝えようと努力することも必要です。

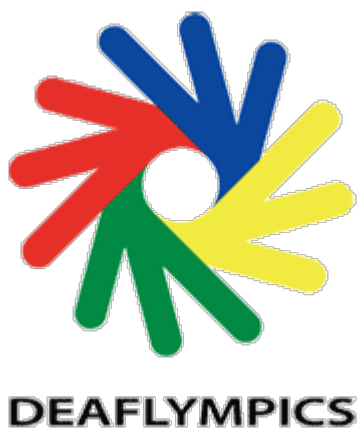


図2 デフリンピック・シンボル

図3 2025 東京デフリンピック・エンブレム

デフリンピック（ろう者のオリンピック）とは

デフリンピックは、4年に1度、世界規模で行われる聴覚障害者のための総合スポーツ競技大会であり、国際ろう者スポーツ委員会（ICSD、CISS）が主催する障害者スポーツにおける最初の国際競技大会であります。夏季大会と冬季大会があり、夏季大会は1924年にフランスで、冬季大会は1949年にオーストリアにおいて始まりました。

オリンピックは平和を守り、パラリンピックは勇気を生み、デフリンピックは夢を育む、と言われていています。デフリンピックへの出場は、ろうの選手の最大の誇りであり、一般ろう者が選手の活躍を期待し、大きな感動を受ける国際競技会です。障害当事者であるろう者自身が運営する、ろう者のための国際的な競技会であり、参加者が国際手話によるコミュニケーションで親睦を深められるところにも大きな特徴があります。

（デフリンピックは、パラリンピックとは別に開催されるのですが）多様性を認めるパラリンピックに「なぜ聴覚障がい者は参加できないのか？」という疑問がよく聞かれます。1989年、国際パラリンピック委員会（IPC）設立当時は、当委員会に聴覚障がい者の団体も加盟していましたが、デフリンピックの「独創性」を追求するために離脱を選択した、という経緯があります。そのため、パラリンピックにろう者が参加できない状況が続いています。

2025 東京デフリンピックの概要

2025年の東京デフリンピックでの目標は、もちろん一つでも多くの金メダルを獲得することです。選手が最高のパフォーマンスを発揮できるよう、あらゆる要因や要素を望ましい状態に導くことが必要だと考えます。

東京2025 デフリンピックの概要は以下の通りです。

開催日程	2025年11月15日（土）から26日（水）まで
会場	駒沢オリンピック公園総合運動場ほか（テニスは有明テニスの森で実施）
競技	全21競技 陸上、サッカー、卓球、バレーボール、バスケットボール、ハンドボール、バドミントン、レスリング（フリースタイル）、レスリング（グレコローマン）、空手、柔道、テコンドー、水泳、テニス、ビーチバレー、自転車競技（ロード）、自転車競技（MTB）、ボウリング、ゴルフ、オリエンテーリング、射撃

デフリンピック日本代表に選ばれるまでの流れ（テニス競技の場合）

デフリンピック日本代表選手になるためには、まず、関東・東海・近畿ろうあ者体育大会、全国ろうあ者体育大会、全国ろうあ者テニス選手権大会（JDTA大会）に参加して上位実績を残す必要があります。

上記大会で実績を残すと、日本ろう者テニス協会強化指定選手候補として推薦されます。その後、年に5回以上の強化合宿に参加し、さらなる技術向上に励み、強化指定選手同士での試合、対外試合での実績（選考会も実施）を考慮して、デフリンピック選手候補が選出されます。そして、日本ろう者テニス協会から全日本ろうあ連盟に推薦選手届を提出して認められると、正式にデフリンピックに出場することができます。デフリンピック日本代表選手に選出してからも、直前まで強化合宿でメンタルや技術の向上に励み、最終調整を行います。

さいごに –デフスポーツ、デフテニスへのご支援のお願い–

デフリンピックへの派遣事業は厚生労働省の指導にもとづき、(財)日本障害者スポーツ協会が派遣主体となっています。そこで、日本障害者スポーツ協会が補助金の申請を担当しており、航空運賃と宿泊費について、障害者スポーツ支援基金等から助成を受けられる見通しとなっています。

しかしながら、当初期待されていた日本自転車振興会からの助成金が突如打ち切られたこともあり、現時点では現地行動費などに充てられる約2,000万円が不足する見込みとなっています。この金額を企業・団体からの寄付で賄うべく、現在派遣委員会委員がお願いに回っているところですが、デフリンピックの知名度の低さに加え、不景気もあり、なかなか厳しい状況です。

デフスポーツでは、オリンピックやパラリンピックと違い、世界大会・アジア大会に遠征する際には、選手やスタッフが部分的に費用負担をしています。少なくとも選手の自己負担をなくすために、個人・法人を問わず、幅広いご協力・ご支援をお願いします。

今年の11月2～5日に、デフリンピックのプレ大会として、有明テニスの森にてDeaf Tennis 2024 Global Challengeが開催されます。会場で応援していただくと選手の励みになります。今後ともデフテニスをよろしくお願いします。ご清聴ありがとうございました。

2) ワークショップ「デフテニス体験 ～聴覚障害者へのテニスコーチングを考える～」

講師 森本尚樹（日本ろう者テニス協会理事長）・梶野耕佑（日本ろう者テニス協会広報）

日本ろう者テニス協会理事長 森本尚樹氏、同協会広報 梶野耕佑氏が講師となり、デフテニス体験のワークショップを実施しました。

体験参加者は耳栓を装着し、さらに遮音性を高めるためイヤーマフを装着してテニスを行いました。ショートラリー、ボレーボレー、ストロークラリー、シングルスゲーム、ダブルスゲームの順で体験しました。体験中に参加者の感想やコメントを聞き、それぞれの考えを共有しながら進行了しました。

ほとんどの参加者が、「最初は違和感があり、いつも通りに打つことが難しかった。想像以上に音の情報に頼っていたことを実感した。」など、音が聞こえないことの違和感を感じたようでした。しかし、体験した学会員は、テニスに精通しているので、「最初は難しかったが、目で見て状況判断して打つことに注意すると次第によりプレイができるようになった。」というように、コツを掴むことで、音が聞こえない状況に順応していくことができたようでした。

そのほかに、「自分はテニスあまり上手ではないので、まわりで『下手くそだな』とか言われているのではと想像してしまい、気になってプレイに集中できなかった。」と、聞こえないことによってまわりで見ている人の反応がいつもより気になり、気後れする気持ちが増幅したという意見もありました。反対に、「いつもより静かな環境でテニスのできたので、むしろ集中してよいプレイができた。」など、聞こえないことによって自分のプレイに集中できたというポジティブな感想もありました。

さらに、「ダブルスでペアにボールを任せる、あるいは自分が打つなどのプレイ中のコミュニケーションが声でできないので、デフ選手はどのようにしているのか？」など、シングルスは慣れてきたらあまり違和感なくできたが、ダブルスでの連携を取るためのコミュニケーションが声でできないので、デフ選手はどのようにやっているのか？という意見がありました。これについては、森本講師より、「基本的には全てハンドサインで指示を出し合う、特に前衛が指示をすることが多い」と説明がありました。デフテニス特有のダブルスのコミュニケーション方法が求められることを実践的に学ぶことができました。



図4 デフテニス体験ワークショップ風景

3. 研究発表の概況

研究発表は、口頭発表8演題、オンコート発表2演題、ポスター発表5演題の合計15演題の発表がありました。内訳として、技術・パフォーマンス分析関連6演題、指導法・教育関連4演題、メンタル関連1演題、その他4演題でした。

研究奨励賞には中村和樹先生（びわこ成蹊大学）「男女エリート車いすテニス選手におけるサーブの重要性について」が受賞されました。テニスの現場で感じた疑問に端を発する研究発表であり、後のテニス界に還元されるレベルにまで追求していただくことを願っております。



図5 研究奨励賞を受賞した中村先生

第36回日本テニス学会 研究奨励賞を受賞して

中村和樹（びわこ成蹊スポーツ大学）

この度は研究奨励賞に選出していただき、大変光栄に思います。ご指導いただきました高橋仁大先生、村上俊祐先生をはじめ、共同研究者の先生方に心からの感謝の意を表します。私が2年前に高橋先生の勧めで初めてテニス学会に参加したとき、先生方がテニスや研究について夜遅くまで熱心に議論されているのを見て、「研究の道を進むのも一つの選択肢だ」と感じたことを今でも鮮明に覚えています。そのようなきっかけをいただいた学会で、このような賞を受賞できたことは大変喜ばしいことです。まだまだ未熟な点多々ありますが、今回の受賞を励みに、これからも一層の努力を重ねて参ります。

また、今回の学会で初めてデフテニスを体験することができました。私の研究テーマである車いすテニスや、デフテニスを通じて、テニスは多様な人々が、様々な形で参加できるスポーツであることを改めて認識しました。今後も実践と研究の両面からテニス界の発展に貢献できるよう、引き続き努力してまいります。

最後に、このような素晴らしい学会を運営していただいた後藤先生をはじめ、運営委員の先生方、学生スタッフの皆様に深く感謝申し上げます。

4. 懇親会

本学会大会としては、コロナ禍以後、初となる懇親会を明治大学和泉キャンパス学生食堂（和泉の杜）で開催しました。学会員のほか、日本ろう者テニス連盟関係者も含めて総勢45名の方に参加いただきました。研究に関する議論や情報交換、懇親を深めることができました。



図6 懇親会の様子



図7 次回大会担当の武田先生

5. テニス大会（小山秀哉杯）

2日目（6月30日）12:15から13:00まで、テニスコートにて恒例のテニス大会を行いました。参加者は12名でした。日本ろう者テニス協会理事長森本尚樹氏、手話サポートの倉掛順子氏も参加しました。和やかな雰囲気でありながらも、ハイレベルで白熱したプレイが繰り返されました。試合方法は、ダブルス6ペアが2つに分かれてリーグ戦を行ったのちに、各順位同士の対戦を行いました。試合方式は、タイブレーク1ゲームマッチでした。各リーグ1位同士の対戦の結果、高橋仁大・岡村修平組

が接戦の末、黒田裕太・村上俊祐組を破り優勝しました。高橋仁大会長の現役時代を彷彿とさせるボレーセンス、岡村修平先生のパワフルでアグレッシブなプレイスタイルがうまくマッチしました。
試合結果：優勝 高橋仁大・岡村修平組、準優勝 黒田裕太・村上俊祐組



図8 優勝した岡村・高橋組

大会終了後にはデフテニス日本代表選手・強化選手、学会員、明治大学体育会硬式庭球部選手とのエキシビションマッチを行いました。次年の東京デフリンピックに向けて、よい交流になりました。



図9 終了後に皆で集合写真

次回開催は、安田女子大学にて2025年9月13～14日に開催される予定です。日本におけるテニスに関する様々な研究が発展する機会となることを祈念します。